

私の食卓のイメージは、妹と囲む楽しいものです。私と妹は、幼いころから、二人で夕ご飯を食べていました。母が仕事でいなかっただけ、母が作っていつてくれたものなどを夜に温めて、二人でその日あった事などを話し、楽しくご飯を食べていました。私は妹と話をしながらゆっくりご飯を食べることが好きでした。妹とご飯を食べながら話す時間は、お互い成長し小学校高学年になっても変わりませんでした。これからも妹と二人で楽しくご飯を食べられると思っていました。

しかし、その日は、突然やってきました。十一月になり、妹は風邪で数日前からねこんでいました。夜に、妹が足がすごく痛いと言い、立つことができなくなっていました、私と母で下まで連れて行き、何とかタクシーに乗った妹は、母と病院に行っていました。一人で部屋に戻って、妹はどうしたのか、これからどうなってしまうのかとぐるぐると考えていたら、母からメールが来ました。妹が入院しそうですから、ご飯をコンビニで買ってきて食べていてね、と書いてありました。その時不安とさびしさの中で食べたおにぎりはとても味気無かった事を覚えています。いつも食卓には、妹がいて、私のふざけた話も一所懸命聞いてくれて、笑ってくれて……。でも今はシーンとしているのです。その日、結局母と妹は帰ってきました。

朝起きると、父が朝ご飯を作っていました。私は、一人ではない食卓に少し安心していました。けれど、父から聞いた妹の容態は、私の想像をはるかに越えていました。妹の病気は、ギランバレー症候群という、四肢筋力が無くなり、腱反射も消失する十万人に一人の難病でした。妹は、口からものを入れる事もできなくなり、手足も動かせなくなっていました。

「しばらくは、ほのちやんと会えないよ。」と父の言葉がショックで何を食べていいのか分からなくなりました。それから、私の食卓は、前の様な活気が消え、色あせていきました。母はずっと、妹につきっきりとなり、食事の支たたくの時だけ帰宅し、ご飯を作ってくれましたが、またすぐ病院へ帰ってしまう生活が続いたのです。私は一人でご飯を食べていました。母はいつも、一人で食べる私の為に、工夫して、おいしいご飯を作ってくれましたが、それもあまりおいしく感じられずいました。

妹の誕生日が過ぎても、クリスマスが過ぎても、妹は帰ってこれませんでした。少しずつトリハビリを続けているものの、面会ができず、私は妹とずっと会えませんでした。冬休みになって、私は祖母の家にあずけられ、久しぶりに、にぎやかに食卓を囲みました。皆で明るくご飯を食べられたことは、嬉しかったけれど、でもやはり妹がいないと心から楽しむことができませんでした。

数ヶ月経ち、妹が帰って来る事になりました。久しぶりに会った妹は、車いすに乗っていて、かなりやせてしまっていました。けれど前と変わらない笑顔で、私の話に耳をかたむけてくれました。無くなっていた活気が戻ってきた様な明るい食卓に涙が出そうになりました。あの時の食卓を、私は決して忘れないと思います。

食卓とは、ただおいしい物を食べる事で幸せを感じるのではないと思います。大切な人と一緒に食べられないと意味がないし、おいしく感じられないのです。そして毎日、大切な人と食卓を囲めることは、当たり前ではない事を学びました。妹と一緒にたくさん笑いあえる明るい食卓が戻ってきた今、私は毎日妹を笑わせ、幸せにしてあげようと奮闘中です。